

推薦のことば

インターネット，さらに SNS の発展により，情報の単なる受け手であったユーザーが，情報伝播の一翼を担ったり，自ら情報を付加したり，発信したりすることが当たり前な世の中になってきた．しかし，そこに流通する情報の質は散々たるもので，命にかかわる医療の情報であっても例外ではなく，誤った情報が感染症のように蔓延する infodemic となっている．

このような時代に，SNS をはじめ，さまざまな媒体を駆使して医療情報の発信を積極的に実践し，多くのフォロワーを有する錚々たる医師らが執筆した本書は，まさに，時代のニーズに則したものである．この現代の伝道師たちの努力の賜物である媒体を紹介するとともに，自ら練り上げた情報収集法，情報発信の際の留意点，さらには，炎上対策などまでも触れられている本書は，情報発信を考える医療者にとってバイブルとなり得るものであると考える．さらに，情報発信のきっかけや情報発信にかける熱い想いなどがナラティブに語られていることは，単なる参考書ではない大きな魅力で，共感を持って楽しく読み進めることができる．

一方，自ら情報発信しようと考えていない医療者にとっても，日常診療における情報収集や，患者とのコミュニケーション，社会との関わり方などさまざまな点で，大変，示唆に富んだ役立つものであると考える．是非，多くの医療者に本書を通して，コミュニケーションのキモを知っていただき，診療に活かしていただくとともに，機会があれば，患者のために正しい情報発信を始めていただくことで，わが国のネットに溢れる医療に関するニセ情報を駆逐し，患者とのより良い信頼関係の構築に繋がると考える．是非，多くの医療者に読んでいただきたい．

2022 年 2 月

国立がん研究センターがん対策研究所 事業統括 若尾文彦

はじめに

現代では多くの人が医療情報をインターネットで検索し、取得するようになりました。2019年1月の日本経済新聞によれば、健康・医療情報をインターネットで入手する人は78%にも及びます。このコロナ禍でますます医療情報はその重要性を増したと考えています。

私がメディカルノートを梅田裕真と共同創業したのは2014年10月です。インターネット上の医療情報はまさに玉石混濁といっても過言ではない状態でした。

それから、7年が経ちました。メディカルノートの創業前から情報発信においてご活躍されていた方も多くいらっしゃいますが、特にここ数年は良識ある医療従事者がSNSなどのインターネットでも、リアルでも次々と情報発信に参入してくれるようになったと感じています。

また、自治体や病院の広報などさまざまな方面で活躍される方も増えてきました。いわゆる臨床医学だけではなくデジタルヘルスや医療産業育成などのアングルで発信をされている方もいます。医療ジャーナリストなど発信サイドによる勉強会やリアル・オンライン問わずイベントを通じた発信もさまざまな試みが行われるようになりました。医師同士の情報連携による医療の質の向上のための取り組みも立ち上がりつつあります。

本書では上記のように多様なアングルから発信やその基盤作りに携わっている皆様にそれぞれ異なった角度から自身の情報発信について執筆していただきました。

また、今回は一人ひとりの情報発信者のナラティブやストーリーにもフォーカスをあてた企画にしたいと考えました。発信の具体的な手法やノウハウはもちろんですが、ご自身のバックグラウンドや情報発信をするに至った経緯、課題感や思いについても存分に語っていただきました。発信者の背景にこそさまざまな学びがあるという自身の思いに皆様に存分に応えていただきました。また、アウトプットをする上ではそれを支えるためのさまざまな日常のインプットがあります。膨大な発信をされている方の普段の情報収集方法についても読者の皆様が大いに気になるころなのではないかと考えており、そちらにも言及していただきました。

医療情報発信者のフェイズやバックグラウンドは多岐にわたります。これから発信を始めようという方、今すでに始めているがよりさまざまな工夫を知りたい方……医療従事者や医療系学生、病院や自治体、製薬企業や医療機器関連会社の広報

担当者……本書を手にとってくださった方も，多様なフェイズやバックグラウンド
をお持ちの方がいらっしゃると思います。

そのような皆様にとって，本書が少しでも学び多きものになれば心より幸いです。

2022年1月

井上 祥

医療者の情報発信

新たな役割と可能性を拓く

中山健夫

京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻健康情報学分野 教授

1 情報—「患者の命綱」

「患者にとって、正しい情報は命綱」と言ったのは当時、がん対策を推し進める中心的な役割を果たしていた島根県に住む佐藤均さんという、大腸がんの患者さんでした。何が正しい情報なのか、どうすれば手に入るのか、それを一元的に進めることの必要性を強く訴えていました。

あれから15年。

がん対策情報センターが発信する「がん情報サービス」で正しい情報を入手することはできるようになりましたが、一方で、書籍やインターネットには科学的根拠に乏しい情報も溢れています。

(「おれんじの会」2021年6月6日付ブログ¹⁾より)

これはNPO法人愛媛がんサポートおれんじの会理事長の松本陽子さんの言葉です。同会サイトから引用させていただきました。患者さんが医療者と話をする時、治療を選ぼうとする時、生命に関わる厳しい意思決定をしなければいけない時、正しい情報は分かれ道の先を示す矢印であり、確かに命綱となるものでしょう。しかし、今日の社会では、大量の玉石混淆の情報の中で、多くの人々が溺れている状況があちこちで見られます。

情報を正しく読み解く能力—「情報リテラシー」は、受け取る情報をうのみにせず、信じられる情報を見抜き、意思決定につなげていく能力とされるものです。世界保健機関（WHO）は特に健康に関わるリテラシーをヘルスリテラシーとして重視し、「認知や社会生活上のスキルで、良好な健康の増進・維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用するための個人の意欲や能力」(health promotion glossary, 1998)と定義しています。

ヘルスリテラシーの3段階を次に示します。

PERSON

17

「医師と患者をつなぐ」にこめられた思い メディカルノートの医療情報発信

井上 祥

株式会社メディカルノート 代表取締役・共同創業者 / 医師・医学博士

2009年横浜市立大学医学部卒。横浜労災病院初期研修医を経て2011年より横浜市立大学大学院医学教育学・消化器内科学、2015年3月に医学博士。「医師と患者をつなぐ」を理念に大学院在学中の2014年10月に株式会社メディカルノートを共同創業し2021年10月現在、代表取締役、2008年北京頭脳オリンピック“WMSG”チェス日本代表、日本オリンピック委員会中央競技団体ドクターとして2013年仁川アジア大会チェス日本代表のアンチ・ドーピングを担当、日本医療機能評価機構EBM普及推進事業運営委員、横浜市立大学医学部非常勤講師、千葉大学客員研究員、横浜市立大学医学部同窓会俱楽部常任理事、横浜総合医学振興財団理事、ITヘルスケア学会理事など。



④ 主な情報発信の手段：**MedicalNote**

情報発信をするようになったきっかけ

医学教育学の大学院生として

2年間の初期研修医を終えた後、母校の横浜市立大学に戻り大学院で医学教育学を専攻しました。研修医修了後ですぐに医学教育学に入るというのはかなり珍しいキャリアなのではないかと思えます。2011年4月当時の医学教育学の主任教授であり私の師匠の後藤英司先生は教室の理念として「メディカルサイエンスコミュニケーターの育成」を掲げておりました。後藤先生は「義務教育段階への医学教育の導入」として横浜市の小学生に対してAEDの使い方などの救急やBLSの授業を展開しておりました。その他にもさまざま



情報発信をするうえで気をつけていること

メディカルノートの特別顧問でもある高久史磨先生（地域医療振興協会会長 / 日本医学会前会長）からいただいたメッセージがまさに我々の信条でもあります。こちらにも掲載させていただきます。

“真に有用な情報を発信するために、メディカルノートには次の2点を大切にし続けてほしいと願います。ひとつは、本物のスペシャリストへの丁寧な取材により一次情報を得ること、もうひとつは、針小棒大な伝え方をしないことです。健康や生命に関わる医療情報を記事化することは、「話題になる記事」を作ることではありません。信頼できる医療情報はともすると退屈になりがちです。そんな地味な情報でも一生懸命に提示し続けていくことが、真に患者さんや医療者の信頼を得ることにつながります。これからは医療人自身もより情報発信をしていかねばなりません。メディカルノートには良識ある医療人のサポートを期待しています。”



情報収集の方法

メディカルノートでは病気やニュースについての情報発信を多くは取材を通して行っています。自身も日常的に医師にヒアリングや取材をさせていただく機会が多数あります。それに向けた準備が何よりの情報収集の時間です。お会いする先生が今までに書かれた文献や関連するニュースなどを調べ準備をする時間はとても楽しいものです。

講演、学生講義や執筆などの機会を頂戴することも増えてきており、そのための準備に向けて論文や書籍を読むことも大切な情報収集です。

ただし、最近は正直なところアウトプット過多になっているようにも感じています。今までであれば講演など1つのアウトプットをするのに少なくともその10倍くらいのインプットをしていた(?) 気がしますが、ここ最近では1つのアウトプットにそこまでできているのかというのが自省です。研鑽のためにも、意識してインプットの時間をとらねばならないところです。

また、一応は経営者のハシクレでもありますので日本経済新聞は電子版だけでなく紙面も契約しており、毎日ざつとですが目を通すようにしています。その他、日常的な情報収集としては「Inoreader」というiPhoneのアプリ